

皮膚科のトリビア

238

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●保土ケ谷区医師会市民公開講座から

令和5年12月3日

誤嚥性肺炎を防ぐ顎持ち上げ体操

75歳以上の在宅患者81人のうち、嚥下機能が正常なのは34人(42%)、喉頭に侵入がある例が21人(26%)、明らかな誤嚥のある例が26人(32%)だった。誤嚥を減らすためには、軽く下を向いてゴクンとしっかり飲み込むことが大事。誤嚥予防には嚥下に必要な喉頭挙上を促すために、舌骨上筋群、喉頭挙上筋群の筋力強化を図る。力いっぱい下を向き、下顎に両方の親指をあてて上方へ力いっぱい押すという顎持ち上げ体操が有効である。

一言コメント

「摂食嚥下の多職種連携が地域で広がってきた。歯科医による嚥下内視鏡や言語聴覚士(speech therapist: ST)による嚥下リハなどの仕事があることを知った。」

●神奈川県皮膚科医会第170回例会から

令和5年12月3日

爪病変治療のTips

手の洗濯板状爪、爪甲中央縦溝症はいずれも後爪廓縁をいじることが原因。後爪廓をいじらないように指導して1日1回リンデロン®VG軟膏を後爪廓に外用することで治る。

爪甲鉤彎症は、抜爪すると正常な爪が生えてくるが、趾先端に達するとそこからは伸びずに外側や上

に曲がってくる。これはすべて、先端の爪床の隆起が正常な爪の伸長を妨害するためである。治療は抜爪後に、趾先端の隆起部を伸縮性のないテーピングテープで下方に牽引する。それでも先端が平坦にならないときは末節骨の一部を削る必要がある。

手の陥入爪は抜爪で治る。足と違って下からの力が加わらないためである。

一言コメント

「爪を切りすぎて短い爪が習慣になっていると、趾先端が歩行時の下からの圧迫で隆起してくる。それが爪甲鉤彎症の原因になる。抜爪のあとの足趾の先端へのテーピングも要領がわかった。」

●日本皮膚科学会第909回東京地方会から

令和5年12月16日

脂肪浮腫では足背が侵されない

30歳代の女性、体重95 kg、BMIは40で高度肥満がある。妊娠を契機に両下肢の浮腫が強くなった。出産後に浮腫はいったん消褪したが、仕事に復帰してから再度増悪した。両側大腿から下腿にかけてnon-pitting edemaが強く、足関節には深くびれを生じていた(cuff sign)。足背には強い浮腫はない。MRIでは両下腿に脂肪組織の増生があり、SPECT検査ではリンパ浮腫にみられる特徴は認めなかった。脂肪浮腫(lipoedema)と診断した。原因は不明だが、患者の60%に家族歴があり、常染色体顕性遺伝とする報告もある。肥満が悪化因子だが、下肢挙上や減量では改善しない。リンパ浮腫を伴うこともあるが、リンパ浮腫と違って患者はほぼ女性のみ。両側の下

腿に左右対称的に生じるが、足背は侵されない。圧痕は残さず、皮膚色も正常。易出血性があり、圧迫による疼痛を自覚することもある。

一言コメント

「思春期、妊娠、閉経などを契機に発症するので、エストロゲンの影響があるのではないかとわれているらしい。欧米の女性を想像した。ただの肥満ではないようだ。」

●日本皮膚科学会第909回東京地方会から 令和5年12月16日

壊疽性膿皮症に伴う肺病変

80歳代女性、両下腿に血疱が生じ、潰瘍化して辺縁が拡大していった。壊疽性膿皮症と診断。胸部X線で多発性の陰影あり。胸腔穿刺で無菌性肺膿瘍と診断、壊疽性膿皮症に伴う肺病変と考えた。プレドニゾン0.5 mg/kg内服で肺病変は軽快傾向にあったが皮膚潰瘍は改善せず、1 mg/kgの増量で改善した。皮膚に無菌性膿瘍を形成した壊疽性膿皮症77例のうち40例で肺病変を伴ったという報告があり、壊疽性膿皮症では肺を含めた全身検索が必要である。

一言コメント

「壊疽性膿皮症の肺病変の診断には胸腔穿刺が必要で、結核、真菌感染症のほか、肺癌の鑑別が必要である。貴重な報告だった。」

●日本皮膚科学会第909回東京地方会から 令和5年12月16日

帯状疱疹による腹直筋麻痺の画像診断

80歳代の男性、右Th10-11領域の帯状疱疹発症後に、右腹部が膨隆してきた。CTを施行、反対側と比較すると、患側の外腹斜筋、腹横筋、内腹斜筋の3層構造が不鮮明で、筋の萎縮が判明した。腹筋麻痺は腹部に生じる帯状疱疹の3%ほどに生じる。診断には筋電図が用いられるが、CTの所見も特徴的なので、施行するとよい。本邦報告例は計66例で平均年齢は67歳、41:25で男性に多い。

一言コメント

「確かに男性に多いイメージがある。この性差の原因は何か知りたいところだ。」

●某製薬会社主催講演会から

令和5年12月23日

帯状疱疹ワクチン接種後の 帯状疱疹発症割合

帯状疱疹ワクチン接種者に生じた帯状疱疹の割合についての報告。水痘ワクチン接種者では1,769人中76人で4.3%、組換えサブユニットワクチン接種者では609人中1人で0.2%だった。組換えサブユニットワクチン接種後1カ月からワクチン接種後10年まで(平均: ワクチン接種後9.6±0.3年)では、ワクチンの有効性は89.0%だった。7,413人の被験者のうち、3人に帯状疱疹後神経痛、2人に汎発性帯状疱疹が発生していた。

一言コメント

「ワクチン接種の普及によって帯状疱疹の発生数が減っていくかどうか、大規模疫学調査の『宮崎ステディ』がそれを示してくれることに期待したい。」

●アトピー性皮膚炎治療研究会第29回シンポジウムから 令和6年2月3日

YaDocによるアトピー性皮膚炎の 痒み管理

アトピー性皮膚炎のセルフアセスメントが臨床的に活用されている。スマートフォンのアプリを用いた患者報告アウトカム(patient reported outcome: PRO)も開発が進み、ePRO(電子患者日記)を電子カルテと連動させるシステムも開発されている。YaDocは通常のオンライン診療システムに加え、モニタリングの項目をカスタマイズできるので、アトピー性皮膚炎に適したePROを設定し、日常生活における臨主症状の把握に活用できる。

一言コメント

「個別化、オーダーメイド医療の提供が必須の時代になっている。こういった疾患管理も必要かもしれない。検討してみよう。」